平成 28 年度

香川大学大学院地域マネジメント研究科
アドバイザリー・ボード会議報告書

平成 29 年 7 月

目　次

アドバイザリー・ボード委員名簿 2
アドバイザリー・ボード日程 3
Ⅰ．アドバイザリー・ボード記録（平成 29 年 7 月 12 日） 4
Ⅱ．説明資料 37
Ⅲ．出欠表 39

平成 28 年度

国立大学法人香川大学大学院地域マネジメント研究科

アドバイザリー・ボード委員名簿

平成 29 年 7 月 1 日現在

経済界 （五十音順）	(委員長) 松田　清宏	四国旅客鉄道㈱　相談役 四国ツーリズム創造機構　会長
	髙濵　和則	大倉工業㈱　代表取締役社長
	竹内　麗子	香川県経済同友会　代表幹事
	長井　啓介	四国電力㈱　取締役副社長
	渡邊　智樹	㈱百十四銀行　取締役会長
行　政 （五十音順）	大西　秀人	高松市　市長
	西原　義一	香川県　副知事
大　学	任　章	北九州市立大学大学院 マネジメント研究科　研究科長
報道機関	行成　博巳	ＮＨＫ高松放送局　局長

アドバイザリー・ボードの日程

期　日：平成 29 年 7 月 12 日（水）13：30 ～ 15：30

会　場：香川大学幸町キャンパス又信記念館　2 階　第 2 会議室

議　事

13：30　　開　会

研究科長挨拶
配布資料確認
アドバイザリー・ボード委員の紹介
地域マネジメント研究科出席者の紹介
検討課題の課題解決計画
平成 28 年度事業報告

14：00　　審　議

15：30　　閉　会

Ⅰ　アドバイザリー・ボード記録

原：　ただ今より香川大学大学院地域マネジメント研究科の平成 28 年度アドバイザリー・ボードを開催させていただきます。私、平成 27 年 4 月より研究科長を務めさせていただいております原真志と申します。どうぞ、よろしくお願い致します。

委員の皆様方には、お忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。厚くお礼申し上げます。アドバイザリー・ボードは、平成 16 年度の地域マネジメント研究科の開設とともに発足し、今回で 13 回目となります。代々の委員の方々には、本研究科の運営に際しまして貴重なご意見を頂戴し今日まで支えていただきました。JR 四国相談役、四国ツーリズム創造機構会長の松田清宏様は、今年度も委員長をお引き受けいただておりますが、あいにく本日は海外出張のために残念ながら、ご欠席でございます。

現在、委員をお願いしておりますのは、

・大倉工業株式会社　代表取締役　髙濵　和則　様、
・香川県経済同友会　代表幹事　竹内　麗子　様、
・四国電力取締役　副社長　長井　啓介　様、
・百十四銀行　取締役会長　渡邊　智樹　様の代理で、
　百十四銀行執行役員　地域創生部長　三宅　雅彦　様
・高松市長　大西　秀人様　の代理で、高松市副市長　加藤　昭彦　様、
・香川県副知事　西原　義一　様
・北九州市立大学大学院マネジメント研究科　研究科長　任　章　先生
・NHK 高松放送局　局長　行成　博巳　様　でございます。

竹内様、長井様、渡邊様、西原様、任先生、行成様には、今回よりお引き受けいただけることになりました。ありがとうございます。それぞれに、ご要職にありながらこのようにご協力をいただておりますことに、重ねてお礼申し上げます。新しい委員の方々に非常にたくさん今回は参加いただいておりますので、是非フレッシュな意見で様々なご意見を頂戴できるようどうぞよろしくお願い申し上げます。本日は、委員長の松田様がご欠席のため、その代理といたしまして竹内様に議長をお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。ありがとうございます。それでは、竹内様どうぞよろしくお願いします。

竹内：　香川経済同友会の竹内でございます。私も、松田会長に同行して海外出張に行く予定でしたが幸か不幸か残ってしまったので、本日のお役となってしまいました。非常に不慣れではございますがよろしくお願いします。では、座って失礼します。

　先程、原研究科長よりのご挨拶にもございましたように今回はビジネススクールの現状を把握し、ご意見をいただくことが主旨でございますのでよろしくお願

いいたします。

　では、大学側に進行をお任せしたいと思います。原研究科長、どうかよろしくお願します。

原：　それでは、以降こちらの方で進行を務めさせていただきます。
それでは、運営につきまして説明をさせていただきますが、その前に恐縮ではございますが、委員の方々に自己紹介を賜ればと思います。それでは、竹内様より席順でご紹介を、よろしくお願します。

竹内：　先程ご挨拶申し上げましたように香川経済同友会　代表幹事の竹内でございます。今年 2 年目になります。今期のみの任期になりますが、おかれたところで、自分がやらなければいけないことに全力を尽くしたいと思っております。さて、今回の地域マネジメント研究科の原先生の方から、いろんな面でご指導いただける立場になったことを非常に幸いなことと思っております。これをチャンスに今までの経済界が右肩上がりのものを、ちょっと違った切り口で新しい活性化にむけて努力をしてまいりたいと思っております。よろしくお願いします。

原：　では、髙濵様よろしくお願いします。

髙濵：　丸亀の大倉工業の髙濵と申します。われわれ、地場の企業といたしまして生徒さんに是非、地元で活躍していただきたいと言う主旨も半分以上ございます。こういうかたちで、意見というほどのものではございませんが、やはり、昨今生徒さんがなかなか地元でいてくれない、一度出ますと帰ってこないという状況です。せめて、ここの香川大学の生徒さん一人でも、二人でも、地元に戻っていただいて活躍してもらえればという主旨で来ています。また、よろしくお願いします。

原：　ありがとうございます。長井様、よろしくお願いします。

長井：　四国電力の長井です。私、仕事の担当としまして新規事業であったり、それから地域の検討であったり、こういうことをやっております。この研究科は、すごく興味深くて、また楽しみにしてまいりました。私共の会社からも、何人も育てていただいて、これがまた、バリバリやっています。今日の午前中にも一人やってきて、逆にいじめられた感じでございます。ということで、何卒よろしくお願いいたします。

三宅：　三宅でございます。本日は、会長の渡邊に都合がありまして、申し訳ございませんが、私が代行でまいりました。私、地域創生部の三宅でございます。今回 4 月 3 日に新しく新設部として地域創生部が生まれました。昨今、地域金融機関特に我々第一地銀、百十四銀行に対する地域の要請が大きいということで、その地域創生の役割を兼ねた新設部で、33 名で立ち上げました。そういう中にありまして、この会でいろいろと学ばしていただこうと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。

原：　加藤様お願いいたします。

加藤：　高松市副市長、加藤でございます。大西市長が出張中のため、代理で来させていただいております。この会で活発に、そして実りのある議論ができればと思っております。よろしくお願いします。

原：　では、西原様よろしくお願いします。

西原：　この 4 月から県の副知事として就任しております西原と申します。よろしくお願いします。前任の天雲同様に、いろいろと地域活性化とか人口減少の中でいろんな課題を抱えていますので、こういった場でご意見いただければ、お聞かせいただければと思っておりますし、またいろいろとこちらからも発信できればと思います。よろしくお願いします。

原：　ありがとうございます。任先生。

任：　北九州市立大学大学院マネジメント研究科の任　章と申します。お呼びいただきまして、私、初めてこちらの方に伺わせていただきました。私共創設以来 10 年目を迎えます。私で研究科長 3 人目なのですけれども、当初は貴学の井原先生からいろいろご指導をいただきまして、後、井原先生は私個人的にも学会が同じ系列なものですから、後はまたさらに個人的なことですが、私の学部のゼミ生がこちらの市役所に勤めており、今市役所の隣の方がいらっしゃり、ちょっとうれしい思いです。この度、北部九州でなかなか雨が止まないとのことですが、いろいろお言葉をいただきありがとうございました。感謝しております。今後とも是非とも、よろしくお願いいたします。

原：　ありがとうございます。では、行成様。

行成：　はい。行成です。よろしくお願いいたします。僕は、元々は丸亀出身で、6 月の 9 日に、先月ですがまた故郷に戻ってくることになりました。NHK という組織は全国放送をしているわけですが、高松放送局は地域の放送局ですから県民の皆さんへの情報発信にものすごく力を入れており今年もいろんな取り組みをしております。今日こういったことで、皆さんのご意見も伺い、我々としましても放送局といったところからの視点で、皆様へのご意見を提案できたらと思います。よろしくお願いします。

原：　ありがとうございました。どうぞ、よろしくお願します。本日は私を含め、10 人の教員が参加しております。私から席順に自己紹介をさせていただきます。お配りさせていただいております封筒の中の、赤い要覧に載っている順番になります。それにしたがって自己紹介をしていきたいと思います。それでは、冒頭研究科長をさせていただいております原と申します。よろしくお願いいたします。私の専門分野は経済地理学というもので、経済活動の地域的な、空間的な側面をいろいろと研究しておりますけれども、授業では地域マネジメント論というのをやっております。これは、元々は産業クラスター論といっていたものを、地域活性化の基礎的なものと位置づけ、基礎科目として 2 年前からさせていただいており

ます。それ以外に、クリエイティビティと地域活性化という少し変わった科目をしておりますが、これは映画の脚本というか地域のかくれた妙味を脚本にしてみようじゃないかというものです。私がロサンゼルスの UCLA のビジネススクールに行かせていただいたことがございましてその時に、この方法論とかも勉強させていただいて、それとうちでずっとやっている地域活性化、地域調査のやり方というものを組み合わせて、他にはないユニークなものとしてさせていただいております。それぞれ社会人の方々はいろんなご経験をお持ちですので、なかなかそこから普段、映画とかドラマにしようと考えたこともない方が多いですが、それを少し自分の持っている宝に気が付いてそういうものを作るという視点でやっていくと意外と皆さん、面白いものを持っていらっしゃるし、非常に皆さん楽しんで、自分の持っている、知らなかった部分に気がついて楽しんでやっていただいています。ありがとうございます。よろしくお願いします。

髙塚：　副研究科長をしております髙塚と申します。よろしくお願いいたします。専門は、企業や家計の立地の分析でございます。そういった観点から地域活性化や地域の課題に取り組んでおります。関連して、授業は、都市開発論そして統計分析を担当しております。最近地マネに入ってくる学生の中に医療や福祉を仕事とされている方がたくさんいらっしゃいますが、統計分析、データを扱う講義をやっていますので、最近では学生と一緒に医療や福祉、社会保障といった、そういった観点での研究を行っております。管理・運営の方面では、入試関係を担当しております。学生集めにいろいろ委員の方々にもご協力いただいております。どうぞ、よろしくお願いします。

大北：　大北　健一と申します。私の職歴を見ていただいたら分かるように、山梨学院大学でして、オリンピックでメダルを取るような生徒を教えておりました。その時には、学生を応援するだけの立場なのですけど、果たしてプロの教員としてそれでよいのか、実は、辞める間際くらいに思いまして、僕も世界でちゃんと通用する研究者になろうと思って 10 年たちました。10 年たって今見ていただいて分かるように各地域のマネジメントのトップの学会でレビュアーを務めたり、国際標準のジャーナルでエディトリアルボードを務めたりしてどうにかやってきました。ここで、今 11 年目、来年で 12 年目ですけどもう一つ上のランクへと、毎日身体を鍛えながら頑張っていきたいと思っております。そういう研究に自分が、実際やってきたものとしてこちらで意思決定分析、それからマーケティング・マネジメントの講義をさせていただいております。そして、間接的に地域の方々に自身の見識を謙虚にお伝えできたらよいなと思って日々頑張っております。よろしくお願いいたします。

反田：　反田と言います。私、一昨年の 12 月末まで総合商社の丸紅のほうに勤務しておりました。で、昨年 1 月に地域マネジメント研究科に赴任しました。その仕事の

関係もございまして専門としますのは、国際経営と事業構想論の 2 つです。講義の内容としましては今までの経験を踏まえまして、できるだけ実務と理論の融合ということで、できるだけケーススタディといいますか、事例を踏まえた講義の内容を実施しています。まだまだ未熟な点もありますけれども学生と一緒にやっているという状況です。よろしくお願いします。

関：　関と申します。どうぞよろしくお願いします。専門分野は、マーケティングでございまして、主に消費者行動や戦略といった分野に関する調査をやっています。授業としましては、マーケット戦略とマーケティング・リサーチの 2 つの科目をしておりまして、マーケティング戦略はプロセスですとか戦略・立案とか、先ほど申し上げた消費者行動に関することなどを中心に講義をしておりまして、リサーチのほうでは、マーケティング・リサーチの全般的なリサーチの管理や資料についての講義をしております。ほかには教務関係の仕事をしております。それに関する内容も含めて、後程、述べさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

佐藤：　佐藤　勝典と申します。私の専門ですが、非営利組織のマネジメントや起業家論、そしてコミュニティビジネスのマネジメントを専門としておりまして、こちら地域マネジメント研究科におきましては社会起業家論、地域観光マネジメントの 2 科目の中心に講義をさせていただいております。そして、また研究科では、研究科と外部会議とのつながりということで委員をさせていただいております。また学内では香川大学と学外に向けての一般の資料ですね、私で取りまとめております。よろしくお願いします。

長町：　長町　康平と申します。よろしくお願します。私の専門は都市経済学、空間経済学という経済学の一部を研究しております。で、人とか企業の経済活動がどういう風に分布するのかということを研究しています。こちらに来て 4 年目になります。略歴をみていただいたらお分かりになりますように今まで非常勤講師として勤務をしておりましたが、実際に本格的に教えるようになったにはここが初めて、それもビジネススクール社会人相手ということでいろいろ勉強させていただきながらやっております。アカデミックな経験しかないものですが、学生の皆さん社会人の皆さんにアカデミックな視点を提供できればなと思いです。担当している科目としては経済分析それから､地域経済分析の 2 科目を担当しております。経済分析の方では、経済学を学ぶのですけど複雑な経済の政策を整理したり評価したりするような、そのための体系的な視点をこちらの皆さまに学んでいただきたいというような内容になっています。これは、ご自身の経験とか直観、常識では見えてこないようなことを、ツールを使うと見えてくる。そういう非常に役立つ経済学の視点を学んでいただくというのが目的であり、経済学、経営学の学際的な分野でいろいろな学問に依拠しているわけですけど、この中で一つの重要な

分野として経済学があり、経済学の視点を学んでいただくということになります。もう一つ地域経済分析とは人口とか都市における人の動きや、地域間格差等などそういった基本的な内容を経済分析の観点からしっかりとメカニズムに関して学んでいただいて、より発展的な内容として PFI としての官民連携、あるいはグローバルなトピックとしては、企業の国際展開における意思決定等を、理論的に、あるいは具体的なケースを使って学んでいきたいといった内容です。具体的なケースを使って丁寧に、しかも理論を使って丁寧にしっかり学んでいくといった内容になっています。よろしくお願いします。

中村：　はい。中村と申します。よろしくお願いします。科目としましては、会計科目を担当しております。学生の皆さまは自治体ですとか企業に所属されている方がほとんどですが、多くの方はこういった会計を意識したことはほとんどないと思うのですけど、普段会計とは直接関わらない仕事をしているような方々にとって自社にとって、組織にとっての会計の意味を考えていただく。その中で、ご自身がいったいどうゆう立場で会社や組織に関わっていくべきかと考えていただくようなきっかけ作りができればという思いで授業をしているというところになります。で、元は教員になる前は経営コンサルタントの会社で 20 年ほど勤めておりました。クライアント様は、主に製造業様でございましたのでまた今後とも特に大倉工業様等々のお話を伺えればなあと思っております。私が、地域マネジメントに来て 3 年目になるのですけど、思い返せば私の妻の父親ですとか叔父の方は地方自治体で政治家をしております。ご存知の方もおいでると思いますが、神奈川の横須賀というところで人口減ですとか高齢化という大体全国いつもワースト 3 に入るような自治体でございます。そういうところで、苦労しながら条例、政令どういう風にやっていこうかとやっている立場でしたので、こういった地域に関わる研究科に赴任することも何か縁があったのかなと思って日々、教員・研究等々に勤めております。どうぞ、よろしくお願いします。

三好：　三好と申します。今回赤の要覧を作るのにかかわったのが私です。私、香川県丸亀の出身です。何人かの方は、ご存じかと思います。ここに書いております、社会貢献の中にも、それ以外にも丸亀市を中心に活動しています。香川県に来るまで何年も地域を巡ってきましたけど、少しでも香川県、丸亀を中心にいろいろしたいかなと思っております。よろしくお願いします。

吉澤：　吉澤と申します。地域マネジメント研究科では、組織行動論と人的資源管理論を担当しております。これまで、長く組織風土調査ですとか従業員意識調査に携わってきた経緯によりまして、ここ数年は個人のキャリア支援、キャリア開発といったことの領域で活動しております。また、地域活性化という接点では四国、香川における地域活性化に関連するケースというものが非常に少ないなと感じておりますので、そういうケースを作ってそれを元に皆さんの学習の場を提供でき

ればよいなと思っております。どうぞよろしくお願いします。

原：　以上が、本日参加させていただいております教員でございます。よろしくお願いします。で、本日残念ながら参加できていない教員としまして板谷　和彦先生が欠席となっております。板谷先生は、ただ今海外での学会発表のため出張中です。板谷先生はこの 4 月に着任していただきました先生で、民間企業で長らく理系の研究開発をされていた方で、近年マネジメントの研究に携わり研究開発をどういうふうにするべきかとしっかりとやるためにはマネジメントの視点がいる、そしてさらに定量ではなくて定性的な方法論を追及されて、非常にユニークな研究スタイルで実績を積み重ねられている先生ですので、また別の機会に自己紹介させていただけたらと思っております。よろしくお願いします。

原：　それでは、配布させていただいております資料の確認をさせてもらいます。

全部で 10 種類ございます。

まず、ファイルにとじた資料、それから座席表、と出欠表があります。封筒にあります、緑色の 2016 年の要覧になります。それから、白色で文字が緑色のこれが概要となります。それから、続きまして 2016 年の情報誌、これは 1 年古いのですけど 2016 年度版の情報誌地域マネジメント vol5.です。7 つ目が、水色の平成 28 年度の修学案内です。そして先程、自己紹介させていただきました赤色の 2017 年度版の要覧となります。それから、学生募集用のチラシ、これが平成 29 年度分の入学、そして 30 年度分があり、夏と秋と冬が各 1 枚ありますから全部で 6 枚あります。で、厚労省からの教育訓練給付金のチラシ、これも平成 29 年度入学と 30 年度入学各 1 枚で 2 枚あります。　以上でございます。

去年までは新しい情報誌をこの場で提供しておりましたが、今年は予算が非常に厳しくて当初これをどうするかと問題になっておりまして、残念ながら今年は新しい情報誌がまだできておりません。残念ながらその報告をさせていただきます。はい、資料はそろっておりますでしょうか。足りない方おいでませんか。

原：　それでは、事前にお届けしておりました資料になかった追加の資料と目次の変更がございます。資料 1、インデックスの印の番号 1 になりますが、「これからの課題と目標」、そして 7 番資料 7 として、「授業評価のアンケート結果」、そして資料 8 としまして「外部資金受入一覧」、そして最後の方になりますけど 18 としまして「将来構想委員会」の資料、19 としまして「文部科学省　高度専門職業人養成機能強化促進委託事業」がございます。最後に、別につけておりますが出欠表、座席表がございます。以上が、追加資料でございます。

なお、目次の変更等により順番が前後している部分があります。ご了承ください。ファイルには通し番号がございますので説明をさせていただくときはそちらの通しの番号を参照していただけたらと思います。よろしいでしょうか。

原：　それでは、この資料の順番に従って説明をさせていただきます。まず、冒頭に

はアドバイザリー・ボード委員の方々の名簿となっております。つづきまして、資料 1 のところの説明をさせていただきたいと思います。これは、まず本研究科の教育理念のところから始まりますけれどもここに書いてありますように、本研究科はビジネススクールではございますが、「地域活性化」に焦点を当てた人材育成を図っているので、地域の特性を踏まえた形で地域づくりの主体的、先導的な担い手、そういうマネジメントの能力を持った専門家を養成するということを目指してまいりました。下のところのスライドには、経営系専門職大学院一般としての基本的な使命があるのですが、さらにそれぞれ各ビジネススクールが固有の目的を設定して差別化をするようにということが求められているのですが次のページに触れますと、地域マネジメント研究科の固有の目的、3 つの円がありますけれども、3 つの養成すべき人材像というのを設定しております。企業の創造的変革を先導し、グローバルな視野を持ちながら地域に貢献するビジネス・リーダー、そして行政部門に新たな戦略と行動力をもたらすパブリック・プロフェッショナル、そして、地域の人々を巻き込み、地域の個性を生かした地域振興を図る地域プロデューサーとこうした 3 つの人材を育成していこうというところが我々の固有の目的ということになっております。本研究科、最近広島の方にもできましたけど、それ以前は、中四国で唯一であった経営ビジネススクールであります。2004 年 4 月全国では、一ツ橋、神戸、九州に次いで 4 番目としての国立大学としてのビジネススクールとなりますが政令指定都市にキャンパスがないのは香川大学のみということで、地方の都市に立地してやっているということですし、名称としても地域というものに研究科の名称が入っているのはうちだけだということであります。本日来ていただいている北九州市立大学大学院も地域に焦点を当てていらっしゃいまして、同じ志を持ってやっていただいているわけですけれども、名称として、研究科に地域をわれわれは入れているということになります。そういった意味でこの個性化といいますか、差別化がかなりできていると考えています。そして、次のページ、認証評価、これが我々経営系専門学院は 5 年に 1 度認証評価を受けてきちんと教育がある一定基準を満たしているだということを認めてもらわなければいけないわけですけど、それについてこれまで 2 度その認証評価を受けまして一定の水準を満たしている、質が担保されているということになります。本研究科の特色としましては 5 つ、多彩な専任教員や講師、これはビジネススクールの分野と地域公共系両方ございます。そして実務家の教員も用意しております。そういった意味で、理論と実務双方向の教育ということでやっておりますし、人数比 2〜3 人くらいの比率の合わせて非常にきめ細やかな少人数教育ということができております。社会人に便利な教育環境、授業の時間を夜の時間帯に設定しておりますし、24 時間利用可能な学生のラウンジというものも設定しておりまして夜の授業の後、さらに残って議論したりするようなことも、夜遅くまで

やろうと思えば可能な環境設定をしております。そして、本研究科において教育理念の中にもありますように多様な学生さんが来ていただいておりますので、人的なネットワークづくりにも役立っていると評価を受けているところであります。続きまして、ここのところはほぼ同じような部分になっておりますので、割愛しますけれども、これからの課題と目標としまして、これまで 10 数年の経験、蓄積を踏まえ、これからの 10 年さらに発展充実させていくために次のような 6 つくらいのポイントがあるかなと考えているところです。1 つは、日本型 MBA 教育の 1 モデルとして地域の焦点を当てるというものが日本型 MBA としてのモデルとして位置付けができるのではないかと考えております。これはアメリカにおいて MBA というのもが発展してきたのですが、必ずしもアメリカ型がそのまますぐに適応してよいわけではない。そうした部分で日本に適応した MBA の形として地域に密着したやり方があるのではないかと考えております。それと、2 つ目実践的な取り組みを具体化していくことを後押ししていこう、これはうちの研究課程 2 年目におこなうプロジェクト研究というもののさらに具体化、それから私共が中心となってやっている香川ビジネス＆パブリックコンペ、これは一般公開でアイデアを募集して、表彰して、盛り上げていくものですが、そういったものであるとか、外部を巻き込んだ研究会や共同研究、こういったものをさらに強力に支援していきたいということです。3 つ目、戦略的産学官連携の促進。これは、地域の大きな方向性を提示してゆく、これの過去の会において加藤副市長から言っていただいた論点にもなるわけですけれども、過去において私共井原理代初代研究科長の時におこなった広域行政に関わる共同研究、県・市と共同でおこないましたが、そこで高松市に高く評価をしていただいて是非それから 10 年ほど経ちますので、それに近いものをというふうに言っていただいております。そういう、個々の連携というものを大学と自治体の間での COC 等を通じてやっておりますが、よりその地域の大きな方向性を提示するといったような論点があり、そういった期待感があります。4 つ目、院生修了生の力を結集して地域活性化の果実を実現していく。これはすでに在校生や修了生を集めるとすでに 400 人を超える規模になってきているということですので、こうした同窓生、修了生の活動というもの支援することで具体的な果実を作っていきたいと思います。5 つ目は、国際化の推進でございますけれども、地域重視のスタンスということで、国際化の国際化をしないということを我々はいってまいりましたが、今観光のインバウンド等にも現れているように地域活性化においても国際的な取り組みの視点とは不可欠になってきている、という事で私共、研究科においても地域活性化に必要とされるような方向性として国際化に取り組んでいこうということでございます。6 つ目、地域活性化に関する研究の促進、これは科研費採択率 66.7%で、これは大学の中でもトップ水準の採択率を誇っているということで、我々研究者としても少数精鋭部隊になっ

ているということで、そうした個々の先生方の研究能力を地域に活かす形で促進していければと考えております。これらの論点は最後の所で最近採択が決まりました文科省の関係の事業の所でもまた具体的に触れさせていただきたいと思っております。続きまして 5 ページの番号 2 経営系専門職大学院一覧となっております。先ほど申し上げたように国立大学の中では 4 番目にできた大学院となっております。続いて、番号 3、ページ 6 の本研究科の修了生・在校生についてです。これは、初年度から現在までの私共の研究科の修了生、在校生の勤務先を時系列でリストにしておるものでございます。一番多いのが香川県庁様でございます。ずっと草創期から毎年学生として送り込んでいただいておりますが、こちらに来ていただいている四国電力様、百十四銀行様、高松市役所様もコンスタントに学生を送り込んでいただいておりますし、大倉工業様からも非常に定期的に学生を送りこんでいただいており、ありがとうございます。そうしたメジャーな自治体や民間企業の方々から、それ以外に後の方のリストを見ていただくと非常に多様な所から送り込んでいただいていることがわかります。ずっと見ますと医療福祉関係が多いなという印象がありますけれども、様々な所から入っていただいております。これに関しまして私は、事前に資料を説明に上がりました際に今日欠席されております百十四銀行の渡邊会長からはこれだけいろんな所から出してもらっているのに驚いたと言うお話がありましたが、逆に 1 回しか出していない所が多いのはどういうことかというような意見を頂戴しまして、1 回出したところにもう一度アプローチかけてしっかりとさらに、2 人目を出してもらう努力をすることでより効率的なリクルート活動ができるのではないかという意見を頂戴しております。私共も、多様な所から来ていただいておりますこともそれはそれでよいことかなと思っていましたが、渡邊会長がおっしゃるように確かに 2 人目が出ないということはどういうことかいう点を真摯に受け止めて少しその方向での努力を考えるべきではないかなというふうに思っております。それでは、続きましてこれまでは、ずっとこれまでのことを見てまいりましたが、平成 28 年度、去年の取り組みについて関連する資料をもとにさらに説明をさせていただきます。では、続きまして 4 番です。11 ページ平成 28.29 年度地域マネジメント研究科の入学状況について、入試委員長の髙塚先生より説明します。

髙塚：　資料 13 ページをご覧ください。昨年度の入試の状況なのですけれども、入学した状況です。その後 11 ページについて本年度の入学状況について説明させていただきます。13 ページの一番上の表にございますように昨年度の入学者に関しては、男女合わせて 28 名となっており、男性 24 名女性 4 名で、ご承知の通り本研究科は定員 30 名となっておりますので、昨年度の入学者につきましては残念ながら定員を 2 名割ってしまったという状況でございます。そのことを反省いたしまして、89、90 ページに資料がついておりますが、昨年度は「香川ビジネススクールに行

こう！現役生との懇談会＆説明会」を年間通して 7 回開催いたしました。これは何かといいますと、実際ビジネススクールに仕事をしながら通おうという方には、正直仕事と両立できるのだろうかという不安が非常に大きいと前から聞いておりました。そういった不安を除くための一番効果的な方法というのは実際通ってそれを実現している生徒とお話して、そのためのノウハウですとか、どういった工夫をしているのかといったことを直接聞くのが一番よいということで、昨年度計 7 回開催して実際 39 名の方に参加をいただきました。実際、半数近くの 20 名が今年の 1 年生として入学していただいておりますので、このような取り組みもまずはうまくいったのかなと思っております。結果ですけれども、もう一度 11 ページに戻っていただけたらと思います。今年 4 月に入学した入学選抜者はこの一番上の表右下にございます通り男性 26 名、女性 7 名、33 名ということです。入試を実際受けていない方も多くて、志願者にございますように男女あわせて 44 名、30 名を大きく上回る志願をいただいているのですが、残念ながら手続きいただけなかった方がいらっしゃったりして、入学いただいた方は 33 名となっています。1 年生、2 年生合わせて計 60 名以上が確保できておりますので、研究科としての達成したい数には達しております。12 ページを見ていただきますと、出身大学や出身地、年齢構成等記載しておりますが、感覚的にも四国だけではなく他の地域から申請いただく方も増えてきております。いろいろな取り組みを通じて、本研究科についても少しずつですが知名度が上がってきているのではないかと考えています。私からは以上です。

原：　では、続きまして資料 5、15 ページのプロジェクト研究について関先生よりお願します。

関：　はい。資料 5、15 ページから 17 ページをご覧ください。本研究科では、大学院の修士課程としてプロジュクト研究を第一に進めております。主に、2 年時に前期はプロジェクト研究、後期はプロジェクト研究発表と、学生のそれぞれのテーマにそって取り組むというような形になっております。その内容としては従来の学術的な研究論文だけではなく、ビジネスプランやフィールドワークを通じて地域活性化に取り組むといった実践的な形のものもございますので、修士論文と言わずあえてプロジェクト研究という呼び方になっております。そのテーマのリストが 16 ページから 17 ページにわたって記載されております。リストをご覧になっていただけたらわかるように企業経営ですとか政策などに加えて、文化、教育、医療、介護に関係するものから、観光、インバウンド、グローバル戦術に関係したものまで多様性に富んだテーマになっています。昨年度は、実践的な研究と分析手法の多様性も生まれてきて、一つの研究の中で文献調査、フィールドワーク、定性分析、量的データを用いた定量分析などが、必要に応じて、あるいはそのすべてを用いたものが多数ございます。昨年度は、そのうち優れた研究 5 件を公開

して発表会を行っております。ページが飛びますが、92 ページと 93 ページをご覧ください。92 ページには公開報告会の様子、93 ページには公開報告会の告知であります。どういう研究が公開報告会で報告されたかと言いますと、16 ページに戻りますけれども、7 番古市さん、13 番古林さん、18 の山下さん、後 17 ページの 20 番の石原さん・佐藤さん・出水さんのグループ、後 28 番小笠原さん計 7 名 5 組が報告をしております。当日の識者講評でも、非常にレベルが向上して、分野横断的かつ実践的な研究が増えたと評価されております。このプロジェクト研究に関連して資料 6 も併せてご覧ください。下が香川県・市町とのプロジェクト研究交流会でございますけれども 18 ページに当日の様子が写真として載っておりまして、19 ページに発表者のリストが記載されております。こちらは、一昨年のプロジェクト研究、昨年度ではなくてさら 1 年前のプロジェクト研究のうちその内容が優れているものをいくつか選出して、香川県だけではなく県内の市町の関連する政策担当者などに報告させていただき、さらに意見交換を行なうものでございまして、今回もたくさんの方にご参加いただきました。こういった形で地域活性化に関する研究成果を外部に向けても積極的に発信しております。是非、参加していただけたら幸いでございます。以上でございます。

原：　はい。では、続きまして資料 7 ですが 20 ページになります。授業評価のアンケートについてご説明いたします。本研究科では、半期ごとの講義終了後、授業を受講した学生にアンケートを提示しております。これは、授業の直後にしていただいているわけで、教員は講義内容、講義運営方法、教材等の改善のために参考にしております。まず、20 ページからは 2016 年度前期の授業評価になります。アンケートの質問項目といたしましては、「シラバスとの整合性」「講義内容の理解」「説明の分かりやすさ」「課題の量」「課題の質」「全体の満足度」の 7 つになります。グラフにもありますけれどもその総合的なものとしまして 25 ページの下のところに全体の満足度があります。平成 28 年度前期は「全体の満足度」は、「非常に満足」が 40.7%、「概ね満足」が 48.4%で、合計すると 89%が肯定的な回答となっております。そして、26 ページからは後期の授業評価になりますけれどもこれにつきましても 31 ページを見ていただきまして、「全体の満足度」は、「非常に満足」が 28%「概ね満足」が 53%で、合計すると 81%が肯定的な回答となっております。さらに、個別の科目につきましてそれぞれの先生方はそれらの項目を精査して変えていくということになります。

原：　続きまして、研究活動に関することになります。資料の 8 の 33 ページをご覧ください。こちらは外部資金の受入れ一覧となります。これは、平成 28 年度に私共教員が研究科外活動として外部から獲得した研究資金の一覧を表しております。全部で 12 件ありますけれども科研費が 9 件、下の方です。地方公共団体からは 1 件、民間からは 2 件となっておりまして多様な研究資金源から資金を獲得して研

究活動を展開しております。

原：　続きまして、地域社会貢献活動に関することですけど、資料 9 をご覧ください。34 ページから 38 ページまでになっておりますが、専任教員の兼業一覧でございます。ご覧いただけますように私共の専任教員が自治体や国の委員、その他学会等、さまざまな社会への貢献ということをしております。全部で平成 28 年度は 83 件の兼業をしてさまざまな形での地域や社会で貢献をする活動を行っております。

原：　続きまして、資料 10 ですね。公益財団法人かがわ産業支援財団との共同研究について長町先生の方から説明をお願いします。

長町：　はい。本研究科とかがわ産業支援財団との共同研究ですが平成 27 年 3 月 27 日に連携協定を結びそこから 3 年間共同研究をおこなうということで進めております。それで、今 2 年経過しておりますけれども、過去 2 年間においてこれは香川県の製造業を対象として実態調査を行っております。概要についてはこちらに載っている通りでして、およそ 1800 社の企業に対してアンケート調査票をお送りして、ご回答いただいた大体 550 社程度です。それを使って香川県企業の実態調査をしているわけですけれども、企業の従業員の売上率、従業員数の売上高といった基本的な内容に加えて、企業の組織、取引関係あるいは取引先の地域や状況、海外展開、今後の事業展開、課題といったことについてアンケート調査をおこない、統計分析を行って企業、企業グループの特徴を整理する、そういう分析を行っています。以上です。

原：　はい。ありがとうございます。では、続きまして資料 11.40 ページの四国遍路 88 サイクリングについて説明をします。これは、四国遍路を自転車で周ると言うことを普及させることを目的としたイベントでございますけれども、一昨年までは善通寺の方で 10 年くらい行っていたものを善通寺ができなくなって、昨年度は四国 JC の方がそれを引き継いで行ったイベントでございます。10 年くらい実施しておりましたが、なかなか認知度が上がらないということを課題としておりまして、昨年度の四国地区協議会の会長の十河さんから相談がありまして地マネに協力していただきたい、是非一緒にやりたいということで、どういった風な協力をしましょうかという事で相談したところ、認知度アップのために動画を配信していただきたいと、イベントの動画を配信していただきたい、それもインバウンドの事も考えて海外の方々にも多言語で配信をお願いしたいとのことで、その分を研究科で受け持ってやっていくことになりました。これは 5 月に記者会見をしております。40 ページの上の写真はこの時の模様ですけれども、この記者会見をしてニュースがテレビで出て、そしてネットニュースになったところで非常に大きな反響がございました。3000 アクセス以上が集中して、サーバーが一時ダウンするぐらいの反響のもなっています。詳細について東京都庁や大阪市役所の方からもたくさん来ているといったようなことも分かったりしていろんなところに反

響があるのかなということがわかりました。で、これは5月15日から10月2日まで、10月2日そのゴールがすでに道後温泉のところで無事その日結願の式を行ったのですが、非常に最後盛り上がってよいイベントになっていたなと感じました。

原: では、資料12、43ページ香川ビジネス&パブリックコンペ2016でございます。これは、私共が中心となりながら、様々な協賛企業の方のご協力を得て、そして自治体の方々のご協力を得て進めていったもので、昨年が 4 年目、今年もすることが決定しており今年は 5 年目に入ります。これは、一般公開で様々な地域でのビジネス、そして地域活性化、地域を元気にするプランを公募しましてその優秀なものを表彰して盛り上げていく、実現をサポートしていくという主旨で行っているものでございます。7月に記者会見した後、募集に入りまして、そして47ページのところにはそのコンペの周知のためのシンポジウムの方をおこないました。この時には、49 ページを見て頂けたらと思いますが一心堂本舗の戸村社長の「歌舞伎フェイスパック」というヒット商品を出された方ですけれども、非常にこの基調講演が興味深かったのは、このフェイスパックのアイデアがこの方が思いついたのではなく、実は東京の方のあるビジネスコンペで賞を取っていたもので、いろいろな理由があって棚晒しといいますか、商品化できなかったというもので、それをその戸村社長が見つけて自分がやりたいというように交渉されて、様々な問題があったものを一つ一つつぶしていって製品化に結び付けて、そして大ヒット、特にインバウンドの各国の方、国際的な海外の観光客の方が非常に喜んで買っていかれるというような、海外の方々が喜んで使ってその模様をインスタグラム・フェイスブックにあげるので非常に宣伝効果も、ネットを使った発信効果といいますか、ネット時代に非常に合った形での PR にもなっており興味深いです。そしてこの方は香川県でも働いた経験があるということで非常に身近に感じる、おもしろい発表になっておりました。

原: で、50ページが公開での審査会の模様で、実際にその最終審査を行ってグランプリ等の賞を決めたところです。さらに、その受賞された方々の夢を実現するためにマッチングをおこなう政策提言プレゼンテーション&ミーティングを年明け、2月1日に行っております。これは、最終審査会に残ったファイナリストの方々に再度プレゼンをしていただきまして、こちらには自治体や金融機関等の方々に集まっていただいて興味がある案につきましては別室でさらに膝を付け合せて打ち合わせをしていくというようなことをしています。

原 : では、続きまして資料13、54ページ学生シンポジウムにつきまして関先生よりよろしくお願いします。

関: 続きまして、学生シンポジウムにつきまして説明させていただきます。資料13、毎年9月に行っている学生シンポジウムですが、昨年度は9月17日に開催されま

した。資料 54 ページに当日の模様で、55 ページは告知、56 ページから 57 ページが案内となっております。第 13 回になりました今回の学生シンポジウムは学生が主体となって課題を選別し、その課題に関する意思決定に新入生全員で取り組むような形でおこないました。四国遍路×出会い、そして×地マネについてという大きなテーマにそって既存のお寺を回る伝統的なスタイルや宗教的な意味合いだけでなく、お寺の周辺とか動線上の魅力にも注目しながら、主に若者へのアプローチをおこなって、四国遍路とそのビジネスとしての可能性について学生による研究報告によって発表がおこなわれました。なおそのあとは、56 ページ 57 ページにも記載がありますが、四国遍路と関連することをおこなう 4 名の方を郊外からお招きして、パネルディスカッションを行って、学生による提案をさらに深めながら有意義な情報意見交換をおこないました。本年度のシンポジウムもすでに予定されておりまして、新入生全員で開催する予定です。よろしくお願いします。

原：　次に資料 14、FM 香川での番組「ラジオで学ぼう！MBA 地域マネジメント研究科」、こちらは本研究科の学生、修了生、先生方の活動をラジオを通じて紹介させていただいているものですが、58 ページの写真は先程の話のシンポジウムの模様を 1 年生の方々に来ていただいてしゃべっていただいている時の写真になります。次にあります 59 ページ表にありますように、様々な学生、修了生、先生方の活動の話題でお話をさせていただきました。この模様は、ラジオで放送するとともにそれを私共のホームページの方にアップして、そして 5 分くらい、非常に短い時間ですので、そこに入りきらなかったロングバージョンをネット上では提供させていただいております。

原：　続きまして、資料 15、60 ページからは主な行事になります。60 ページは入学式、新入生ガイダンス、61 ページは修了生を交えた年に 1 度のリカレントプログラムの当時の模様になります。この場合、元四国財務局局長の中山恭子先生が、このリカレントプログラムの前のところで毎年講義をしていただいていますけれども、そのリカレントプログラムの中では新しい先生のお話や修了生の活躍している模様など、いろいろと話題を提供して情報のアップデートというふうにさせていただいております。64 ページは昨年度のアドバイザリー・ボードの模様になります。65 ページからは、これは合宿ですが毎年 9 月に地域活性化を行っている今日海部会現場に実際にいって 1 泊 2 日の日程で地域活性化を現場で体感しながら話を聴く。そして、現地の方々と交流するとなっておりますけれども、昨年度は、徳島県の南阿波に行かせていただきました。まず、左の上にある銭湯、銭湯の後改装してサテライトオフィスにしておりますけれども、「あわえ」という会社の山下 COO の方にも話を聞きましたが山下様は元々、東京の IT 企業で働いていて、東京での働き方について疑問を持っていたと。そしてまずは神山の、サテライトオフィスで有名な山の方のところで働いておりました。神山がわかる非常に

有名な写真、川に足を突っ込んでマックで仕事をしている写真がありますが、そこに写っているのが山下様です。で、その山下様が神山だけでしかできないのはだめだなということで、ちょうどそういうふうに考えたときに「あわえ」の吉田社長、美波町出身の方が東京で起業されていて、地元でサテライトオフィスをしたいとの声掛けがあって、そういう縁があって今ここでサテライトオフィスをしているということです。それ以外でも、南阿波よくばり体験推進協議会、その近辺の3町で行っているものですが、特に中学校、高校の修学旅行等の合宿研修の世話を住民の方々がいろいろとできることを提供するという事で、この時は民泊をされているおばさん方に集まっていただいて話を聞いたのですが、非常にそれぞれ元気があって圧倒されるというか、非常に生き生きとされているという、そのエネルギーを感じて、非常に皆さん印象深く感じているようでした。こういった、住民の方々の力をうまく結集してやっている取り組みなどは非常にすばらしいな、と、こういう方が香川でももっといるのではないかという印象を持ちました。その時のお話をしていただいたスライドがこの後に 67 ページから 88 ページとなっております。その後の 89 ページは先程髙塚先生から入試のところで説明をしていただきました。続きまして、92 ページ先程関先生からプロ研の公開報告会の説明がありました。94 ページは、修了式です。95 ページからは、様々な形で外部の先生方に来ていただいて授業をしている模様です。野村證券からの提供の授業もありますし、四国経済事情っていうものが 97 ページからございますがこれは、四国経済事情の 15 コマの授業は 3 種類あります。まずは、地域政策というのは行政のトップの方々にお話をいただいて浜田知事や大西市長にも話をしていただいています。その他にもいろいろとございますし、101 ページの地域資源は地域活性化のリーダーの方々にお話を伺うもので、写真は丸亀商店街振興組合理事長の古川さんとなります。さらに、103 ページからの企業経営でいうことで企業のトップの方々にお話していただいております。大倉工業の髙濵社長にもお話していただいております。JR 四国、百十四銀行からもお話をいただいております。それから、提供講義としましては 105 ページかがわ産業支援財団からの中小企業に関する授業これは一般公開と言う形でさせていただいており 106 ページにそのチラシ、具体的な昨年度の講師の方々のお名前がございますけれども非常に好評で多くの方々、外部からも参加をしていただいています。そして、もう一つ、公開でやっている提供講義が 108 ページ、四国ツーリズム創造機構の提供講義の観光創造に関する授業でございます。109 ページのチラシがあります、これも各地でおこなわれている観光関係のより深い取り組みを具体的な話をしていただいて好評を得ております。その他、様々な形で公開での授業をしています。そんな中で、変わったとこでは 116 ページの「ビジュアルストーリーティング」ハリウッドの方で撮影監督をしていらっしゃる岩倉さんに来ていただいて、ハリウッドの方では視覚

的にメッセージを伝える際にどのようなことを考えてやっているかを、実際のハリウッドの映画を題材に紹介をしていただきましたし、同じ映画でも 118 ページこれは「四国経済事情」の一環として益田祐美子プロデューサーの新しい作品、これはドキュメンタリー映画で、東日本大震災の被災地である女川のところでの震災復興が国際的な協力、カタールからの援助というものによって非常に進んでいるという様子のドキュメンタリーを上映してそしてプロデューサーに話を聞きましたし、女川の復興には満濃町の方のグループも関わっているということでそのグループの方々にも来ていただいてその取り組みの話をしていただいております。では、こうした公開講座の一つとしてキャリアワークショップについて吉澤先生の方から説明お願します。

吉澤：　ここ数年３月に、毎年３月に修了生と在校生を対象にキャリアワークショップを開催しております。なぜ、キャリアワークショップを開催しているかと言いますと地域マネジメント研究科に進学したとこから学生の方々にとっての転機でございますので、そういうタイミングでこれまでのキャリアそれから今後のキャリアについて考えるという機会を提供しております。具体的には、価値観の棚卸ですとか、スキルの棚卸、それから環境分析、性格行動タイプについての認知をしていただいて最終的にその後のキャリアについてのアクションプランを作るということを２日間かけて実施しております。今年はちょっと人数が少なくて５、６名の方に集まっていただいて開催いたしました。毎年５名から１５名くらいの範囲で参加をしていただいております。以上です。

原：　はい、ありがとうございます。

では、続きましてメディア関係の資料になりますが、資料 16、124 ページのリスト、まずこちらが新聞やテレビで地域マネジメント研究科を報道していただいたリストになります。新聞の方でも様々な、テレビの方でも様々な報道をしていただいておりますが、新聞記事に関しましては 125 ページから具体的なものを載せてございます。「８８サイクリング」これは、先程申し上げたものや、それから、ビジネスコンペ関係があります。134 ページ、135 ページのところですけれども、四国新聞の方でこのように２面を使って大々的に、詳細に対応していただきました。これを、浜田県知事がご覧になってこの地域公共部門のグランプリ、廃校整備「就活支援課」にというこの記事を、非常に関心をもっていただいて、これを徹底的に調べなさいというふうにお命じになったということで、私共でも対応させていただきましたが、その後サンポートでそうしたものを作られるとき、二人はアドバイザーとして助言をして、二人が実際県内出身で松山の大学にいっていて、そして就職は香川県内に戻ると考えていたのですが、県外に出ていったものが、県内に就職活動をすることがどんなに大変かといったようなことをそれぞれ具体的な体験をもとに話をされていましたので、そうしたところから、アドバイ

スをいろいろと県の方にさせていただいたという風に聞いております。

原：　続いて、資料 17 をご覧ください。これは四国 TLO から声掛けがあって行ったイベントですけれども、これは技術ベースのビジネスプランの発表、そしてブラッシュアップをはかっているというもので、四国 TLO の方では往々にして技術よりの話になりがちですのでマネジメントやマーケティングという観点を是非、補っていただきたいという働きかけがありました。丁度、うちの修了生が四国 TLO の方で働いていて、その彼からそして知財センター永富先生からの相談があって、それは是非よい話だ、やりましょうとなって意外と周りにこういうものがなかったので、やってみたのですが、やってみたところ非常に評判がよくて実際ディスカッションで非常にいろんな意見が出ましたし、その懇親会においても私共の教員そして、在学生、修了生と各大学の院生や先生方と、非常によい交流ができましたので、四国 TLO さんから、是非これはよかったので継続をしてこういった形のものをやっていきましょうと言っていただいております。

原：　では、続きまして、資料 18 番、これは最初のほうに申し上げた今後ということに関係するわけですけど、平成 28 年度におきましては、私の研究科長直属の諮問委員会として地域マネジメント研究科将来構想委員会を設置して、今後の私たちの研究科がどのようなことをしていったらよいかということについて検討をおこないました。特に、若手教員といいますか、着任後新しい先生を中心として取り組んでまいりました。そこに書いておりますように、研究面、教育面、社会貢献・地域貢献面といったことを検討していこうということになりまして、139 ページにありますような会議を 6 月から順々にやってきましたが、当初は教員に先程のリストのようなテーマを割り振って一人一つずつ担当をしてもらいながらそれぞれの発表をしてもらっていましたけど、やはり重なってくる部分がありますのでこれをグルーピング化して大きく 4 つのグループとして最終的には産学連携、コンテンツ化・アウトプット化、国際化、エグゼグティブプログラムといった 4 つのグループとして報告し、まとめていただいたという事になります。140 ページはそれぞれの会においてどういったテーマで、報告していただいたかということをリストであげております。で、この将来構想委員会の中で、具体的にこういうことをするとやっていたものがその次の 19 の資料、141 ページのところですけれども、これは今年度になりまして文科省から高度専門職業人養成機能強化促進委託事業というものの公募がございました。要するに我が国のビジネススクールの機能強化をする、その教育プログラムの開発を補助するという主旨のものでして、私共は、このもともとこの 4 つのミッションから自然に導かれますが地方創生推進のための経営系専門職大学院の機能強化の事業ということで、特にそのサブタイトルとして、メディア・コンテンツ活用人材教育プログラム、国際ビジネス研修プログラム、四国型地域マネジメント・ケースメソッド教育、ポスト MBA プログラ

ムと 4 つの柱を軸とした案を作って申請をさせていただきました。つい最近、これについて採択するという通知書をいただいて、「やったな」といったところでございます。そこの目的は要するにこれまでの実績を踏まえて地方創生に貢献するような機能強化、そしてそのための教育プログラムの開発をするといったことになります。その背景といたしましては、一つ目は地域の課題や研究開発としてさまざまな地域活性化のおもしろい取り組みがあちこちであるのだけれどもそれがバラバラであるというような形でありまして、せっかくいいことをしていても、それを求める人にうまく情報発信ができていない、情報発信力の不足がございます。二つ目は冒頭にも少し言いましたが地域活性化のための国際化というものが必要になってきている、その対応が求められている。3 つ目は修了生からさらにプロジェクト研究でやったことを実現していきたい、あるいはさらに新しい課題があってそれに取り組む、そのために地マネの先生方のアドバイスを得たい、あるいは地マネと協力し合う形で進めたい、そういう継続学習や活動への支援の要望が寄せられているのでその修了生の活動を支援するという事もしなければならない。4 つ目は冒頭で申し上げました地域の大きな方向性を示すような産学官共同研究に対する期待というものがある。5 つ目は点在する地域活性化、バラバラなもの取り組みを束ねてそして、持続可能な継続できるビジネスに練り上げていく役割がやはり期待されている、といったようなことが色んな自治体や民間企業の方々、そして修了生とから寄せられている。こうしたものに応えるために、下のところにありますような 4 つのプログラムをまずは開発することを通じてやっていきたいと。一つ目はメディア・コンテンツ活用の人材協力、これも発信の強化ですけれども、やはり香川高松においては、そういったメディア・コンテンツ関係の繋がりや集積が弱いですので、そういった部分は東京や海外、ロサンゼルスの方から専門の方に来ていただいてそういう最先端の取り組みについて知っていただいて、それと地域活性化の取り組みとがどう上手く結びつけるかというかについて学んでそして実践につなげるようなそういう機会、そういう教育プログラムをやっていこうとしています。2 つ目は国際ビジネス研修プログラムです。国際的な知見というものを反映させながらやっていくという事で、具体的には本年度イタリアへの国際研修というものを考えております。イタリアはご存じの通りデザイン面で非常に衣類や工芸関係等、中小企業が多いそういう製造面においても非常に付加価値の高い取り組みが評価されている、そういった意味でも日本においてもそして四国、香川においてもそうした中小企業が価値のある取り組みをしていくために参考になるようなもの、という事でございます。これにつきましては、うちの研究員、教員の佐藤先生がフィレンチェ大学のソーシャルセンターのところでの先生の繋がりがあってそのようなことを軸に進めていこうと準備中でございます。3 つ目は四国型地域マネジメント研究科のケースメソッド教育です。これは

先程、話をしていただいた吉澤先生が中心となって進めていく予定ですけれども慶応の方で日本においてはケースメソッド教育が着目されて進められておりますが、意外と地域活性化に関するケースにあんまり作られていない。一部葉っぱビジネスのいろどりのケースですとかが、ほんの少しあるくらいであまり本格的にはあまり広がっていないという事で、やはり地域に関するようは様々な複雑な状況下で意思決定、コンセンサスを得ていく必要がある、その問題をやはりその、現場に即した形で学んでいただくそういったケースというものを、地域に即したケースの取り組みのあるいはそのケースを作っていける人材、そしてそれを活用して地域活性化の広がりを持たせることができる人材を作っていこうということで、取り組みを進めていきます。4 つ目はポスト MBA プログラムです。これは、修了生の支援ということになりますが、MBA の後というのはドクターコースが制度的にはあるのですがドクターコースとなりますと研究者養成となってしまう、そして 3 年はかかるというそういった意味で、うちの修了生のニーズには合わないということになっています。そういった意味では今の制度にはない何か別の工夫をする必要があるなということで仮にポスト MBA プログラムという言い方をしてそれが、どういう形でやるのがよいのかということを実験的に走らせる中でこのポスト MBA プログラムを設定して近い将来実現していきたいと考えています。これにつきまして、昨年度は 3 件採択をして実験的に行っておりまして、それは非常に良い成果となっており、やはりお墨付きというものがちゃんとあることによっていろんなものが前に進んでいくといったような結果が出ていますので、それについて今年もさらに拡大をしてその中でやっていくということを考えております。この委託事業がちゃんと社会のニーズに合った教育をおこなうといった設定になっております。でその場合においてもまさに、こちらの委員の方々にどういう需要があるか、こういう事をしてほしいそういう検討をしていただく場として位置づけて、これにつきましてもご意見を頂戴できればと思っています。説明は以上になります。

原：　それでは、残りの時間で委員の皆さまにご意見をうかがいたいと思います。
それでは竹内議長、今後の進行をお願いします。

竹内：　はい。ありがとうございました。それでは、意見交換をいたしますので各委員の方々、お一人 5 分程度をめどにご意見をお願いいたします。まずは、大倉工業髙濵様お願いします。

髙濵：　本当に毎年こういう形で盛りだくさんという表現が正しいのか、失礼なのかよくわかりませんが、本当に我々も学生という形で従業員を派遣しております。目的というものをどういうところにおいて、というのも正直に言って私自身は何をしろとも言わずに、まあ行ってみまいと言っています。それはなぜかといいますと、私も、田舎出身です。結果的に田舎育ちですので、別に地域の活性化という

より地域の継承という形でいいわけです。例えばお寺でもそうである。神社もそうである。そういう組合も、地域の要所といえるようなところ全部。私の場合、たまたま若い時からそういう仕事をやっていますけれども、そしたら今若い人に継ごう、むしろ誰かいるかとみても無理なんです。ましてはどんどん、人がいないことはなくて高齢者ばかり、そして若い子はいない。こういう環境の変化と言いますとね、結果的にね、いまの現状をとらえると、いったい何をして地域の活性化をするんやと。そこで、実際に生活をした時の実感と本来マスコミを含めて地域活性化「これやって、あれやって」というものにものすごくギャップがあるのではないかという風に感じています。正直言いまして。で、我々はメーカーで、丸亀っていうところで本社があります。いつもいうんですけれども、我々、地域貢献とは何ぞや。そして、結果的に地域を活性化さすために何をするのか、大上段に言葉だけではどうしようもない。それよりも、まずは環境を整える、まずは従業員。人を雇う、雇用を確保する、という事を確実にやっていく。それで、もし何か悪くても、があっても絶対首きるな。この表現きついですが。従業員が辞める、辞めるんやったら他の事業をやらす、絶対首きるな。色んなやり方をしながら基本形に何をしているかというとそこにできるだけ従業員というもの、人をそこにおくということに重点をおかざるをえない。一方では、今は人が足りません、来てほしい、先程も最初にそんな言い方しましたけれども、人足りないです。今後どうなるか、今は足りないですと言う方が正しいです。となってくると、どこの企業さんもどんどん自動化していくということになっていく。そうなると、今の仕事だけやっていて人が足りないから新しい仕事をしないという現象が起こったとすれば、疲弊、より急速に疲弊をどんどんしていくと。今から新しいものを含めてやっていかなあかん。そのために人がいる。その人を急には採れない。だったら安定的に確実に常に、分かりやすい人事政策、これを実行はしています。ただ、我々が欲しい人材と来てもらえる人にミスマッチがあるのは事実。それはあります。何を言いたいかというと、要は地域活性化にしても人が基本になっています。はっきり言います。人がいるから、人を呼び込みたい、何したい、消費者としての人、供給側、サービス側としての人、結局人が基本になっています。そのあたりをどういう形でこの色んなプログラムの中へ活かしてもらえれば、という事なんです。人がいないから何もできないのではなくて、今いる人をどういう形で、っていうのも一つのアイデアです。そのためには、人を何とか抱え込んでおかなければいけない。会社としてはですよ。それは地域も同じです。その所をもっと分かりやすくというよりも、具体的にやっていただくとね、もっと中に入りやすい。一人一人は、そう意識を持った人が結構いるんです。その場がない。やはり、この高松まで、私は三豊ですが、一生懸命やる、そんな子は少ないです。会社から行け言われるから行っているわけです。そういう現実がね、ある中でや

っていかざるをえない。という事ですから、よりインパクトのあるやり方を是非お願いしたいと思っております。我々ができる協力は、協力って言葉はおかしいかもしれませんが、この香川県・四国を活性化するためにという前提は絶対忘れないですけれども、本当に一人一人ができることって小っちゃいです。小っちゃいですけれどもそれを継続することでベースを作っておけば、そのベースの中で活かせるやろうと。さっきの雇用じゃないですが、雇用を確保しておけば、何があってもやっていけるやろと言ってしまったらいろいろとありますけれども。と言う風に地道に考えております。そういう事で、何が言いたいかというよりも、人そのものを教育していく、人材という形で教えていただくという事が一番大切な事やなと。ただそのことが結果として本当にいかせるようにならないでどうやってやっていくかというところも含めて、どういう事をやれば本当の意味で会社で役立つ、家に帰れば地域の人間です、みんな従業員です、地域に帰ってそこで、ちゃんとその地域で貢献できる人材に育っていくのが一番です。それはもう、我々の会社の従業員が地元に帰ってそこで活躍するというのが一番大事にしております。スポーツ少年団、それも一生懸命やれ、お祭り、全部参加しろ、といいながら仕事にかまけているのはだめだろう。やっぱり言い続けないと、仕事があるから出ないと言う方が絶対楽なんです。皆さんは地元で生活しておりますので、私はど田舎の田舎ですけど地域に一番根ざしたものである。だから、そこから見た地域の活性化と住んでいる人にとっての地域の活性化というのにギャップがあるということを踏まえて是非出したいと思っております。アイデアとかは、ないです。私は、具体的にこういうことをやっていきますというだけのことです。長くなりました。すみません。

竹内：　ありがとうございました。では、長井様よろしくお願いします。

長井：　私共も、毎年この地域マネジメント研究科にお世話になっております。我々の会社の社員も非常に優等生でして、当たり前の仕事を先輩のやり方にそってきちっとやることには長けているんですけれども新しいことをやるとなると、チャレンジとかになると非常にこう問題があるということがあったんだけど、やはりこの研究科に入って帰ってくると、少し言う事が変わってきて視野も広がってきて非常にありがたい。状況が違いますが、我々は会社が近いので結構自ら手を挙げて来たいという状況です。なんでそうなっているかというと、我々電力会社も自由化をやって、今までと同じことをやっているとやっぱりいけないと皆さん分かっている。で、かつ四国電力や四国電力グループが地域の皆さんとちゃんと役に立っているという事で我々の経営がなりたっているということがようやく浸透してきた。かつ従来と同じことをやっていたら駄目でやはり新しいことにチャレンジをしてそれなりに成果を上げないとやはり、会社としても会社の中の自分のキャリアとしてもよろしくないことを分かっているという状況ではないかと思われ

ます。今、何を期待しているかというと、我々の会社やはり先程言われたように「本業」をきちんとやっていくことが非常に大事ですから、「本業」もやり、電気事業もちゃんとやり、例えば海外の事業もやり、新規事業もやり、これはもちろんもうけるという事も必要ですし、会社の基盤を安定さすためにも必要である。従業員の雇用を守るために必要である。もう一つは、やはり地域のお役に立つことで、やはり我々の電力を買っていただくそういう意味合いも含めて地域の不便、あるいは地域の元気になるような事を何とかやりたいという思いがあります。そういったことをやるためには、やはりこのような研究科の所で地域に溶け込んでいってどんな仕組みでやっていくかを勉強することは非常に役に立つという事です。かつ、自分たちだけではなく地域の人々があるいは、他の人達から何を考えているからなど勉強することが非常に役に立つ。そういったことを学んできてそういったことを学んできたものを例えば地域事業の検討や、地域活性化の検討というところに実際に充てている状況であり、非常にたよりになっております。今回、先程の絵がありまして 4 つの象限がありましたけど、3 つ目の象限の中の地域の仕組みの中に入っていくというところがあったんですけど、そのあたりがすごくやっぱり我々得手でないところであって、そのあたりをもっと充実させていただいて四国型地域マネジメント・ケースメソッド教育、そのあたりを叩き込んでいただくと非常に我々としてもありがたいし、また四国あるいは香川県としてもいいかなと思いますんで是非そのあたりよろしくお願いします。

竹内：　ありがとうございます。では、三宅様よろしくお願いします。

三宅：　はい。先ほど、ご挨拶のときに申した通り金融機関の立場として非常に大きな役割が最近要求されております。そういった中において、先ほどの方が申した通り人材のニーズについては、我々金融機関の中でも非常に高まっています。定期的にこちらの方で学ばせていただき、派遣させていただいているわけですけれども、こうしたプロジェクト研究の中であるもの、それから学術研究から出たものが、この中にはたくさん見えるんですけれども、より実践的に、また、社会的な需要に近づけていくということがやはりもっともっと取り組みをやってしかるべきかなと思います。特に海外ですとか、最近の大手のファイナンスなんかを見ていますと、やはりそのまま事業化される方がどんどん出てきておりますので、より事業的発想の中でこういったテーマとかそれから、大学外の企業あるいは市町村そういった協力をマッチングしていくことがやはり重要なのではないかと、やはり自己満足に終わってはいけないということだと思います。やはり、最近の産業とか色んな社会の変化というのは激しいもので、やはりこの起業ニーズが一番やっぱりあると思います。すぐに、フィンテックとか、フィンテックに絡んだ新しい事業もありますので、そういった産業革命といわれるくらいの変化の中にいるという事は間違いないと思われますので、そういった中で、今申し上げたこと

の視点ということでより望まれていると思います。プログラムのテーマを拝見させていただいても、現実的に実業の中で活かせるような、タイトルはあるんですけれども、そういった中で実業家の方々をたくさん呼ばれているのかとか、そういったところがやはり課題だと。そういった中でやる気があればそういった人材とそういった事業のマッチングもできると思いますし、そういった中で、ここで学んだ方が実践の会社の中にそのまま入って活躍できる、あるいは他のところに行ってもまたそういったアルバイトができる、そういったプラスプラスの関係が必要になってくると思います。また市・町、我々金融機関、それから各会社もですけど非常に多くの地域創生のニーズに取り組んでいる、いろんなことをやっているんです、そういったものと連携しつつ、よりお互いに取り組まないといけないということかと思います。我々金融機関も、市・町のいろんな研究会とか評議会とか、そういったものに参加させていただいて、こういった縦糸と横糸の関係とよく言うんですけれども、そういった縦糸の関係をしっかりと地域につないでいかないと各自がバラバラにやっていたんでは四国みたいな小さなところでは全く他の地域にかなうわけがないので、そういったことを我々金融機関としてもプラットフォームとしてやっていきたいと思いますし、また大学自体がそういったプラットフォームになれると思いますので、そういったことを期待したいと思います。我々金融機関も地域分析などはどんどん RESAS を利用してしなさいとか、ベンチマークを使ってしなさいとか、そういう学術的なものもどんどん入ってきていっていますので是非大学ともご協力を、一緒にやれたらと思います。

竹内：　ありがとうございます。では、加藤様よろしくお願いします。

加藤：　職員を見ていますと、通常の業務と違った発想、やっぱり非常に楽しんでいるし、非常にモチベーション高くやっている。帰ってきて、一回り大きくなったのかなという気がしていまして、それが次の仕事に繋がっているのではないかなと思っています。今日ご説明頂いた中で、意見といいますか、研究の交流会をやっています。県庁の方でいろいろ研究について発表を行って、それを各自治体の担当者が聞いてという形です。こういった取り組みはありがたいので研究成果をフィードバックできるような場をさらに拡充していただけると、いろんなヒントがいただけるなあ、と思っております。取り組みを続けていただきたい。これはもう一つ、ビジネス＆パブリックコンペをやっておられます。一つは、起業につながるようなもの、実際にフォローもやっておられるということですが、実際は起業に繋がっているとか、あるいは地域活性化に繋がった例があるのか。本当に今、市でも県でも起業とかに非常に力を入れておりますし、それが地域の活性化につながっていくということで、こういったコンペをやってどういった成果がでているのか、後ほど説明をしていただければありがたいなと思います。以上です。

竹内：　ありがとうございました。

原：　今、成果についての質問がございましたが、2年前のグランプリが一番分かりやすいかと思います。そのビジネスコンペのグランプリですが尾田美和子さん「ツタエル」という会社で、尾田さんは2年目のチャレンジで、1年目もファイナリストになったのですがその時、賞は取れなかった。2年目のチャレンジでグランプリを取ったのですけれども、尾田さんの場合 2 年前の最終審査会の時のプログラム「ファーストシューズ」ですよね、その西陣おりを使って三豊の会社が作りそして、善通寺で祈祷するという形で、地域のいろんなものを結びつけた形で、そして、今買う方々が増えている、お父さんお母さんよりも、むしろお爺ちゃん、お婆ちゃんだというようなマーケティングもしていて非常におもしろい、地域のものを上手く結びつけていく、そういう潜在的に需要があるなとところを押さえたものを提供して、起業、すでにその当時には会社を始めていましたがそれを本格的に販売していくというラインのところの直前のところでコンペにご応募されました。それについては私の方でもコンペの後でマッチングをしますが、それが終わっても駄目だと、さらにその後、本当にこれがちゃんとした会社となりそして、販売し、雇用がうまれるというところまで育て上げると、そこを我々ももう少し強化しないといけないと話を協賛企業の方々も少し相談をしていて、この尾田さんの例なんかは、一番テコ入れをすべきという事で、その先も支援をしています。もう一つの方は、2年前のパブリックの方でのドローンを使っての離島の間をつなげると言ったものです。そちらの方はまだ商業化というところまでいっていませんけど、いろんな実験は進んでいるというように聞いております。法人化ということがなされているという事です。両方とも日経流通新聞にコンペ以降の取り組みが紹介されるという、いろいろと注目されている活動はできていると思います。

竹内：　ありがとうございます。では、西原さん。

西原：　はい。香川県庁でも、こういう地域マネジメント研究科でいろいろと勉強してもらっているんですけど、そういう研究科の中でやはり違う見方をいろいろとしてもらうというのが、僕は重要だと思っていて、従来の仕事の中での同じような考え方で仕事を進めるというのじゃなくて、また違った面でこのいろんな職種の方と一緒に勉強するというのは一つの見方が変わるだと思っております。そういう意味合いでは、恐らく入ってこられた時に在校生の相互のコミュニケーションを図るための色んな工夫をされているんだと思うんです。そういう中で、違う職種と違う内容の仕事の中身とか地域とか、いろんなことを触れ合うことによって違う発想をしてもらう。そういうのが出てくればもっといいかなと思います。これはちょっと、なかなか人にもよるんだと思うんですが、そのどういう目的意識で入ったかというのもあるし、まあまずは勉強してみようと、そういう形で入った人もいるでしょうし、たぶんいろいろ違うんだと思いますし、そういう人達が、テーマがあって勉強する中で恐らく知識は増えるんですけれども、その単に知識

が増えただけでは、多分それを活用するという事にならないんでね。その違う人とのコミュニケーションの中でこれはどう思うかとかそういうことをしながら、なんか自分のためになるというものに変わっていくと、そういう事を何かしてあげるという工夫がいるんではないかと。そういう意味合いでは、研究グループみたいな感じで、たぶんされているんだと思うんですけれども、そういったグループで、何か一つこういう事をやってみませんかとか、そういうものを、一つテーマを与えながらいろいろ講義を聞きながらそれを何か一つ、数人でもいいんですけど、まとめるというものを、もう少し強化していただけたら、もっといいかなと感じです。そういう研究成果自体を個人の研究の成果をあるでしょうし、グループの研究成果も含めてこういうことを学んでみたとか、という事を発表させることによって発表力もつくし、逆に発表を聞いた人がこういう発想での研究もあったんだなという振り返りもできるとも思われるので、そういうこともさらに充実していただけるとありがたいなと思っています。

竹内：　ありがとうございます。

原：　ちょっと、ご説明をします。今質問をいただいた件について、違った見方をしてもらうためのコミュニケーションというと、私共、先生、最初入っていただいた段階で、アカデミックアドバイザーというものが付きます。これも、複数の教員が付くというので、その人数 5～6 名ぐらいに付くんですけれどもそこでどういう事をしたいのかという話を聞いて、その目的認識に合う形での履修を指導していますが、それとやはり意識をするのが、今までやってきたことを強化するという方向でも良いけど、やってない勉強を地マネだからできるんですよと、そういう発想でもいいですよというのが、様々な観点からその人の成長につながる方向に選択肢をそこで提示させていただいて選んでいただくという、それも一人の教員ではなく数名、できるだけ分野が違ったり、年齢が違ったり、という組み合わせでそういうものをするのですが、違った意見からのアドバイスを聞いてもらいながら自分の地マネでの生活の設計をしてもらう、そういう工夫もさせてもらっているというところがございます。グループで何かをするという観点からは、ちょうど先程加藤副知事から言われたことに関係しますが、去年のグランプリをビジネスコンペで取ったグループは県庁の方も、高松市の方も入って、民間の女性がリーダーでしたけど、それはまさに、このある自治体の職員の人がラウンジの所で申請しようとビジネスプランなどを作って、なかなかいい案がないところに一人二人と「何やっているんだ」ということで入っていって自然とグループができてお互いに相談をして一つのものになっていった、そしてそれは前期に受けていた授業を総動員することになったという、まさに県庁から来ていただいている方の発言ですけれども、まさに地マネ的なものになったと。そういう意味ではコンペに出して良かった、またそのグループでやってよかったと言われていたんで、

おそらくその西原副知事が言われているものは、ああいう、僕のイメージでするとそういうものをもっと促進するような工夫を我々はした方が良いんではないかという感じがしました。そういう意味で言うと、反田先生の事業構想論はそれを意識してやっています。反田先生、説明をお願いします。

反田：　昨年度は20名くらい講義を受講されたんですけど、だいたい3から4名のグループに分けて、最初のアイデアから事業計画から、実行プランまで、それで中間報告と最終報告といった形でしております。最後にそれぞれを評価するんですね。一人2回手を挙げていいと言う形で、だいたい2つくらいのチームが良かったとその内容を評価してもらうんですけれども、上位2チームには私から若干プレゼントを出すということで、いろいろと競争とかそういうものも含めて、あるいは他の方のアイデアを聞くという事が重要ですので、そこでいろんな知識、プレゼンの方法とか身につけて、それから必ず全員に発表してもらっています。相互に、全体的に能力を高めるといったことを目指しているといった内容です。

原：　ありがとうございます。

竹内：　ありがとうございます。では、任先生お願いします。

任：　はい。北九州市立大学の任です。私も、現状を少しお話させていただければと思います。先生方全員で11名おられるんでしょうか。私共、9名。修了者がすでに400名を越している先程説明いただいたと思うんですが、私共在籍者を入れましても250～260名といったところでまだまだ香川大学で勉強させていただきたいという思うところがいっぱいございます。そういう中で、科目を拝見いたしまして私共にあって香川大学でひょっとしてないかなと思われる科目は、例えばロジスティックですね、あと北九州市立大学ですと、北九州地域は医療、病院が多いものですから、歴史的な経緯もございまして、ですから「医療経済」という科目を挙げておりまして、医師、看護師、なども一定数入学者で多いです。後はですね、先生方と同様に我々も将来構想的なものを、もちろん温めなければいけないということで、総合改善委員会なども作ってですね、次回の認証が、基準協会認証が2021年の3月で切れるんでね、まあ新しい構想を温めようかと思うんですが、香川大学の場合には、やはり2年それよりも早いのかなと思いました。将来構想委員会の先生方は、現役の先生ばかりなんでしょうか。そうしますとこの資料の18の将来構想委員会はワーキンググループという感じなのかと拝見したのですが、場合によっては本当に、長期の将来構想であれば学外の先生方、名誉教授その他の方を含めた超長期の将来構想と、中期のワーキンググループ、それを識別しても、というようなこともありうるんではないかなみたいな、私個人はちょっと生意気なことを考えたんですけれども。あとはですね、私共認証で、結構いろいろつきましてですね、例えば足元の問題でサバティカルに行っている教員がいるのかとか、在来研究はどうなのかと言われているんですが、やはり9名でや

りくりしているところなんであまり十分研究者にそういった時間を与えられていないということなんですが、先生方もうちょっと所帯が大きいかと思われますが、ひょっとして先生方も大変お忙しそうな感じがするんですね。研究マインドが非常に高い、そういう先生方がいらっしゃる中でこれだけ課題抱えていらっしゃるということは、私共同様に大変なんじゃないかなというふうな想像をします。また北九州の話に戻りまして北九州、私、東京から 13 年前に赴任してきまして九州のこと何も分からなかったのですが、10 年以上たちますと、さすがにだいぶん見えてまいりまして、地域の団体ですと商工会議所以外に、青年会議所、北九州活性化協議会、こういった団体とジョイントでいろいろ企画することも多いんですが、そういった場合には事業承継ですとか、地域の高齢化に対する何等かに関する施策ですとかですね、そういった要求と言いますか何か企画をしようという事が多いんですが、片方でやはり北九州、海に面している土地柄で国際化という事も忘れることはできないということで、海外研修を年に 1 回、昨年まで研究科長でした王効平先生がマカオだとか香港、中国、台湾に連れて行くというようなことでそれを単位にして単位として出しております。先ほど、イタリアに研修があるという格好、企画があると伺ったんですが、そういう場合には、こちらでは貴学では単位を出されているのかどうかと、イタリア遠くですからどれくらいの日数で行かれているのかなど、そういったあたり教えていただければ、我々も東アジア諸国を念頭においたあたりで国際化を標榜しているんですけれども、他方で九州大学はアジア全域をという事ですが、やはり国立大学と私共公立大学との若干のギャップがございますで、私共は東アジアを念頭にといったところでございます。あとは、私個人、会計学を教えているんですけれども、私自身は東京の大学で会計学を勉強しますとトレンドとしては、やはり会計の国際化だとか、具体的に申しますと IFRS 国際会計基準とかそういうようなことを勉強してきたんですが、北九州市立大学としてはやはり地域の中高商工業者のニーズにも合ったということで、税務会計を教えてはどうだと、私個人ではなかなか教え切れないですけれども、そういった科目を充実させてはどうだという声がある一方、やはり限られたリソースの中で今後の中長期的な科目編成等では悩むところであります。しかるに、たとえば語学でも中国語ビジネス、英語でのビジネストークのような科目もあるんですが、それがちょっと中途半端で終わっておりまして、先生方の国際なる将来構想委員会もあるという事で、その辺は先生方とも今後情報交換させていただいて方向性を決める上でいろいろご示唆いただけたら幸いだと、そう感じた次第でございます。以上です。

竹内：　ありがとうございます。

原：　ありがとうございます。では、ちょっとよろしいでしょうか。いくつか質問がございますので、回答できる範囲でさせていただきたいと思います。ロジスティ

ックス、医療経済という事があるんだけど、確かに私共のところにも医療者関係で来られている方も多くて、それに直接的に答える科目が今の所設定できていないというところが現状です。そのあたりは、できればどこかのタイミングで充実させることができれば、一定のニーズがあるということは我々も実績としてありますので、ちょっと考えることができればよいなと思っております。それから、確かに長期の将来計画としては外部からの委員を入れてはどうかということ、たしかにその通りだと思いました。これは今年度以降に少し強化する形でできればいいかなと思いました。そして、サバティカルについては、4 年くらい前まではありましたが、少し間が空いていたんですけれども、今年の後半からは髙塚先生が出られるというようなことになっていて、何とか我々も少ない人数で大変ではありますが、その辺はその中で工夫をしてやっていこうと思います。国際化に関しましては、北九州市立大学の方が非常に先進的にやられていて、このアドバイザリー・ボードはお互いに交流させていただいておりまして、私も北九州市立大学のビジネススクールのアドバイザリー・ボードに先日参加させていただいて、その時王先生がやられている国際研究についてはすごいな、すばらしいな、というふうに感銘を受けた次第です。その刺激もあって是非うちも、国際研究のようなものに工夫ができればというように私も思った次第でございます。でまあ、単位につきましては、今年は文科省の委託事業が採択されたことがあってですので、まずは単位にはならないところで、まずは実験的にやってみるということで、単位化できるかどうかは来年度以降の検討事項になってくるかと思います。中国語と英語のビジネスの授業ということに関しては、我々も今まで初期の経験からいうと授業でちょっとでも英語を使ったらもう拒否反応がすごかったことがあってですね、我々はそれぞれ国際学会で発表したり、国際的に仕事をしたりしている先生が多いんですが、その感覚でやってしまうと、この地元の事情としましてなかなかちょっとついてくる人がいなかったということがあって、そうした意味では本当に中国語、英語なりを授業の中で本格的にやるとしたらその辺はどのようにすればついてきてもらえるか、確かに悩ましいなと考えているところであります。また、そのあたりちょっと中途半端になっているということではありますが、事情を教えていただければ幸いであると思われます。ありがとうございます。

竹内：　ありがとうございます。行成様お願いします。

行成：　私は、冒頭申し上げましたが高校卒業と同時に香川を離れ大学に行ってこの会社に入って、この会社で全国を転々としてきましたので、香川に住むのは 37 年ぶりです。大昔の香川県を知っていて、最近の香川県は知らないような状況で、ひと月ようやく経ちました、というような状態です。ですから、なかなか新しい、新鮮な目で見えるという部分もありまして、本当に僕が知っていたことと違ったことがいろいろ起こっているということです。一つは、この地マネさんのことも

知らなかったんですけど、こういう中で地域活性化というのを謳ってその実践者というのですかね、中心的な人材、担い手を育成しようと志を持ってやってらっしゃるというのに非常に僕はビックリして、こういう取り組みがあるんだと感動しました。これからですが、それをどうやっていくかという事で、口幅ったい話なんですけど僕が思ったのは、やっぱり実践をした方がいいですよね。役に立つということが大事だと思うんですよ。研究も、我々の報道もそうですけど。NHKの取り組みをやっぱり皆さんに役に立つことをやりたいとずっと思っておりまして、やっぱり作り手が趣味でやってもやっぱり駄目じゃないんかと思います。こちらの例えば自治体の皆さんとか、企業の皆さんとか、最終的には県民の皆さんが上手く役に立つというか、ちゃんと研究と実践が実になるところまでつなげることを目標にして進んでいくということはすごく大事なことかなと思います。我々は今ちょっと、地域の活性化と、なかなか活性化って難しい話なんですけど取組みとしてキャンペーンを1年かけてやろうとしていて、それは「香川が1番」というキャンペーンです。県民の皆さんにやはり地元は 1 番だよねというようなことを感じてもらいたいという事で旬の人のインタビューとか新たな取組みとか、ユニークな活動とか、そういうものを放送していますけど、非常に楽観的なタイトルに見えますがその裏に非常に危機感があって 1 番っていうふうに言ってもらいたいということは、なかなかそういうふうなとこまでたどり着いていなくて、不安になったり自信を持てなくなったりってしているんじゃないかなと、地方は全部そうですけど。香川だけに限ったことではないんです。今、地域地方では非常に何か不安を持って皆さん元気がなくなっているというようなことがあるので、その裏返しで香川が 1 番という形で出していこうという、そういうやり方でしています。そこからですが、僕がこっちに来て気がついたことは、丸亀町の商店街などを歩いていると外国の方が非常に多くて香川県昔はこんなに外国の人いなかったでしょ。そんなことであったので、実は、昨日ゆう 6 かがわという 6 時台の僕らの番組なんですが、そこで放送したんですが、記者を台湾に派遣してですね、台湾で実は人気なんですって、香川県が。で、台湾で人気、香川がなぜっていうような番組をやりました。それはやっぱり瀬戸芸が中心で、瀬戸芸に来てくれた方たちが台湾に帰って香川の良さを広げてくれているというような話です。うどんのことについてもそうだし、向こうで我々日本人がやっているのではなくて台湾の人達が本出したというような形で面白いことをやっているという話をしたんです。台湾との飛行機も大体 70%乗れば搭乗率が、採算が取れるらしいんですけれども 71.5%を取っているということで、もう採算ラインを取っているということです。そういうリポートをやりましたが、問題はここからです。マスコミというのは、現状レポはできるんです。こうこうこういう状況があります。こういう事をやっています。台湾で香川が人気です、ということには行くんですけれども、

問題は、じゃそれをどうやって先に進めるかという事です。今の状況をもう少し拡大できないかということを考えるとなかなかそこの知恵が浮かんでこない。そこにはやっぱり僕らも勉強はするんですがなかなか追いついてない部分があって例えば皆さんのように、この知見をいろんなところで先生方の分野の分析があるんで、なんか将来的になにか大きくしていくというか、提言していくとともに、データも含めて色んな分析を行って、どうやってやればいいのかということまで先を進めてもらえると、我々のところから先が少し出てくる感じです。今までの蓄積みたいなものもあるでしょうし、いろんなところをご覧になっているし、企画研究とか、いろんなことがあるんじゃないかと、そういう言ったことも含めたところで大学院として人々を養成して、役に立つようなところまで総意を決集してやれるといいなと思います。いろんな所から学生さんが来られているし、色んな企業さんが来られているので、そういった人たちも含めて皆さま方のところで地域を盛り上げるようなところまでやっていただくと我々と上手く住み分けではないですが、連携した形でできるかなと、そこに期待します。以上です。

竹内：　ありがとうございました。

原：　そうですね。実践することが大事、やはり行成さんからのお話から「動く」という事が大事というようなことでございました。そうした意味では、我々の実践的な人材育成を標榜してきておりますが、実際起業をしたいというような、あともう一歩のところをどう強化していくかというのが大きな課題になっているかなと。ポスト MBA プログラムというのは、動こうとしている修了生を助けてその最後の一歩を押し出すというための工夫の一つではありますけれども、香川ビジネス＆パブリックコンペ等いろいろやっている中で、我々のプロ研の中で言うと、その経験からするといろんなこういうことをすればよいのではというアイデア自体は、非常にいろんなアイデアが出てくるのですが、それを、本当に歯を食いしばってやるという実践者になりきれるかというところで結構大きな課題があるということかと思います。なので、そのプレイヤーとして大変な問題をつぶしていく、その基調講演をしていただいた一心堂本舗の社長のような実行力と言いますか、そこの部分を、最後の人材育成ということが我々にまだ残された大きな課題かなと思っているところですので、今日のお話の起業や実践というところではさらに肝に銘じて強化することをやっていかなければと思っております。ありがとうございます。

竹内：　ありがとうございます。最後ですが、私はこの地マネに関わらせていただきましてまだ日が浅うございますので、意見を申せるほどのことはございませんが、この資料を読み込むということもできなく、チラッと見せていただいただけでも、入学者の男女別の比率と言うのが非常に女性の比率が低うございます。そういうところを少し陽の目を当てて長いスパンで育てていかないと、先程キーワードと

して出てまいりました「ひと」それから「地域の活性化」、そういうものにはなかなか結び付いていかないのではないかと思っております。企業から送り出される学生さんというのは大半がやはり男性の方でございまして、女性の方がこの年代の時に非常に家事とか、子育てとかで厳しい年代にあるということは十分承知でございますが、女性も男性と同じように、というかそれ以上に勉強したいと思っておりますし地域に貢献したいと思っているし、働きたい、企業に貢献したいと思っていますのでそのあたりも、もう少しご検討いただけたらありがたいかなと思います。NHK の委員をされています小林郁夫さんが今の時点でダイバーシティーなどという言葉を言っている企業や団体は 10 年後には必ずなくなるであろうということを明言されている時代でございますので、私たちは本当にそのあたりをもう少しフラットに考えて、シビックプライドという言葉がございますが、これを四国力と香川力という形に置きなおして次世代のその次のジェネレーションの育成に励みたいと思う次第です。

原：　ありがとうございました。ちょっとよろしいでしょうか。今の竹内さんのお話として女性確かに比率は低いので、なんとかしたほうがいいのかもしれないということがございますが、髙濵社長から来ていただいた方がこの春修了した方のプロジェクト研究で、会社の中で女性の人材をいかに活用するかと取り組んでくれておりましたし、2 年前のビジネス＆パブリックコンペのグランプリで受賞した 5 人のうち 4 名が、女性が代表となりました。これは我々別にねらったわけではないけど、結果として自然とそうなったと。やはり女性の発想力とかはやはり一目するに値するといいますか、非常に斬新な新しい柔軟な発想でこういうことをしている、あるいは生活をしている中での実感としてこういうことをちゃんとしなければいけないという認識能力というか着眼点が非常に優れているという事がありますので、先程竹内さんがおっしゃっていただいた「女性も勉強したいといったような人もいるでしょう」といった部分は何らかの働きかけをしてもよいんじゃないか。そしてこういう話をする会社の方の反応としても、そうなのか、女性を地マネに送りこむことがいいことなのか、という風なことを言われる方もいらっしゃるので、そういったところを払しょくするために、女性で来ていただいてこんなふうに活躍している方がいますよと言うようなところから攻めていくと、男女比の比率で女性が低いという事も改善する方向にもしかしたらいってくれるのではないかなと思っているしだいです。ありがとうございました。

竹内：　それでは、少し時間がございますので、自由討論をさせていただきたいと思います。他の委員の方々のご意見を踏まえましてのご意見がございましたら、また付け加えることがございましたら、どなたからでもご発言をお願いいたします。いかがでしょう。

竹内：　今、原先生の方から一人あたりのお時間が延びてしまったのでお時間が来てし

まうとのことですので、なければこのあたりで原研究科長にお渡ししますのでよろしくお願いします。

原：　ありがとうございました。最後、自由討論の時間を設定しておりましたがかなり充実した内容を提言していただいたと思います。本当にありがとうございました。今後の参考になるご意見を非常にたくさんいただいたかなと思っています。感謝を申し上げます。今日いただいたご意見の、起業であったり、グループでやる方向であったり、実践していくといったことから、そしてまたきちんとやはり、そもそも雇用環境のことをとっても、何がための人か、人が大事といったような原点、我々が考えるような原点を含めて非常に再認識をさせていただいたと今日本当に思っております。こうした、ご意見をきちんと受け止めまして今後私共の運営に改善するように取り組んでまいりますので今後とも、ご指導ご鞭撻のほどをどうぞよろしくお願いいたします。それでは、この感謝をもちまして挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

Ⅱ　説明資料

香川大学ビジネススクール 2016 年度　　要覧・概要・情報誌
香川大学ビジネススクール 2017 年度　　要覧
平成 28 年度　修学案内
学生募集チラシ

Ⅰ　これからの課題と目標.....資料 1

Ⅱ　関係資料
経営系専門職大学院一覧.....資料 2
修了生・在校生の勤務先リスト.....資料 3

Ⅲ　教育活動
1)平成 28・29 年度入学状況.....資料 4
2)平成 28 年度プロジェクト研究一覧.....資料 5
3)香川県・市町とのプロジュクト交流会.....資料 6
4)授業評価アンケート結果.....資料 7

Ⅳ　研究活動
外部資金受入一覧 .....資料 8

Ⅴ　地域・社会貢献活動
1)平成 28 年度兼業一覧.....資料 9
2)かがわ産業支援財団との共同研究.....資料 10
3)四国遍路 88 サイクリング.....資料 11
4)香川ビジネス＆パブリックコンペ 2016 .....資料 12
1. 7 月 14 日：記者会見
2. 8 月 6 日：「常識破りのアイデアが地域を元気にする！」シンポジウム
3. 11 月 26 日：公開審査会
4. 平成 29 年 2 月 1 日：政策提言プレゼンテーション＆ミーティング
5)9 月 17 日：第 13 回シンポジウム .....資料 13
「四国遍路×出会い×地マネについて」
6)1 月 5 日～3 月 30 日：FM 香川 786 SUPER MEDIO
「ラジオで学ぼう！MBA 地域マネジメント研究科」 .....資料 14

Ⅵ　おもな行事 等 ..... 資料 15
【行事】
1）4 月 4 日：入学式・新入生ガイダンス
2）5 月 21 日：地域マネジメント研究科リカレントプログラム
3）7 月 20 日：アドバイザリー・ボード
4）9 月 24 日、25 日：南阿波合宿（四国経済事情と地域資源）
5）12 月～1 月：香川大学ビジネススクールに行こう！―現役生との懇談会＆説明会―
6）平成 3 月 18 日：プロジェクト研究公開報告会
7）平成 3 月 24 日：第 13 期生修了式・学位授与式
【外部の実務家による講義】
8）4 月～8 月：野村證券株式会社提供講義「地域開発と資本市場の役割」
9）4 月～7 月：「四国経済事情（地域活性化と地域政策）」
10）8 月：夏季集中講義「地域マネジメントとファイナンス」
11）9 月：夏季集中講義：「四国経済事情（地域活性化と地域資源）」
12）10 月～平成 29 年 2 月：「四国経済事情（地域活性化と企業経営）」
13）10 月～平成 29 年 2 月：一般公開「地域の中小企業と経済活性化」
14）10 月～平成 29 年 2 月：一般公開「地域活性化と観光創造」
15）11 月～平成 29 年 1 月：「オリーブ事業化マネジメント」
【公開講座】
16）7 月 8 日：公開講座「地方における R&D 型中小企業の市場開拓戦略」
17）7 月 16 日：公開講座「地方創生を担う人づくり、組織づくり」
18）9 月 14 日：公開講座「ビジュアルストーリーテリング」
19）9 月 28 日：公開講座「サンマとカタール」
20）10 月 22 日：公開講座「戦略人事とキャリア自律」
21）平成 29 年 3 月 19 日 20 日：公開講座「キャリアワークショップ 2017」

Ⅶ　付録 ..... 資料 16
新聞・雑誌記事

Ⅷ　四国における大学発シーズ商業化..... 資料 17

Ⅸ　将来構想委員会資料..... 資料 18

Ⅹ　文部科学省　高度専門職業人養成機能強化促進委託事業..... 資料 19

Ⅲ　出欠表

アドバイザリー・ボード出欠表

	氏　名	会　社　名　・　役　職	出　欠
経済界（五十音順）	（委員長） 松田　清宏	四国旅客鉄道㈱　相談役 四国ツーリズム創造機構　会長	×
	髙濵　和則	大倉工業㈱　代表取締役社長	○
	竹内　麗子	香川県経済同友会　代表幹事	○
	長井　啓介	四国電力㈱　取締役副社長	○
	渡邊　智樹 （代理）三宅雅彦	㈱百十四銀行　取締役会長 ㈱百十四銀行執行役員地域創生部長	× ○
行　政（五十音順）	大西　秀人 （代理）加藤昭彦	高松市　市長 高松市　副市長	× ○
	西原　義一	香川県　副知事	○
研究者	任　章	北九州市立大学大学院 マネジメント研究科　研究科長	○
報道関係	行成　博巳	NHK 高松放送局　局長	○
教員	原　真志	教授、研究科長	○
	髙塚　創	教授、副研究科長	○
	板谷　和彦	教授	×
	大北　健一	教授	○
	反田　和成	教授	○
	閔　庚炫	教授	○
	佐藤　勝典	准教授	○
	長町　康平	准教授	○
	中村　正伸	准教授	○
	三好　祐輔	准教授	○
	吉澤　康代	准教授	○
陪席	香西　博之	香川大学法学部・経済学部総務係 事務課長	×

出席者　18 名